

熊本地震に鳥取中部地震

いつ大分・伊予灘地震が来てもおかしくない？

小坂正則

熊本・大分地震から半年余り経った、10月21日に鳥取中部地震 M6.6 震度6弱が起きました。そこは活断層のない場所だったのです。そして翌日22日の深夜3時33分には日向灘で震度4の地震が起きました。大分や伊予灘沖で本当に熊本地震並の地震が襲ってくるのではないかと、私は心配でなりません。ただ、地下の動きは100年や1000年単位の動きですから、半年後に動くとか1年後に動くなどとは言えません。ただ、この間の日本列島の地震を振り返って見ると決して100年などという長期の動きなどではなく、5年や半年の動きのように思えてなりません。なぜならこれまでの20年ほどの間に起こった大きな地震を並べてみれば分かります。

1995年1月17日兵庫県南部地震M7.3 (818ガル)

2004年10月23日新潟県中越地震M6.8 (2515ガル)

2007年7月16日新潟県中越沖地震M6.8- 柏崎刈羽原子力発電所敷地内にある地震計1基における観測データから、震度7相当 (993ガル)

2008年6月14日岩手・宮城内陸地震 M7.2 (4022ガル) 日本国内観測史上最大値)

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震M9.0

2014年11月22日長野県神城断層地震M6.7

2016年4月14日熊本・大分地震M6.5 (1580ガル)

2016年4月16日熊本・大分地震M7.3

これだけ多くの地震がこの間わずか20年そこそこの間に起こっているのです。確かに熊本地震が起こったから大分でも今すぐ巨大地震が襲ってくるとは言えませんが、もう当面熊本では巨大地震は起きないのではないかなと言えます。地震エネルギーが解放されたからです。つまり、日本列島の中で、まだ巨大地震が起こっていない場所の方がこれから大きな地震が起きるのではないかなと思います。

「伊予灘沖の中央構造線を再検証する」小松正幸さん講演会報告 (9.28コンパルホールにて)

小松先生は、「これまで四国電力や国が中央構造線」と言ってきたものは、本当は中央構造線ではなく、あれは中央構造線が動いてできた断層帯なんだ」というお話です。「断層帯とは中央構造線が動いたことによって起きた地震による活断層で、それ自体はたいして心配する必要はないそうです。問題は異なった地質がぶつかってできた中央構造線自

体がどこにあるのかが一番問題なのだ」そうです。

そして、先生の説では様々な調査で分かったことだが、これまでの説である中央構造線が8キロから5キロ沖合にあるのではなく、三崎半島のすれすれの海岸線から1.5キロから0.6キロの場所に中央構造線は走っているのだ」というのが小松先生の説です。

この説はまだ調査を行って証拠を集めなければ今の段階では仮説だとい本人も話しています。(興味のある方は「小坂正則のブログ」で検索願います。

<http://nonukes.exblog.jp/23572049/>)

中央構造線はいつ動くのか

私は小松先生に「中央構造線が動くのはいつ頃なのでしょう。先生はどうお思いですか」と、聞きました。すると、先生は「それは私にも分からない」とお答えになりました。「地震は予知できないんだよ。明日起こるかもしれないし100年後かもしれない。予知したとしても、その幅が100年くらいあるんだからそんなものは予知にはならないんだよ。ただ地震が起きることは間違いのないんだから、地震が起きても災害を最小にするために減災対策を行うべきなんだ。地震への安全対策というものは必ず新たな巨大地震によって覆されるんだよ。その経験を踏まえて次の対策を立てて来たんだ。日本中地震が起きない場所などないんだから、原発など建ててはならないんだよ」だそうです。

小松先生の説のように中央構造線が伊方原発のすぐ直近を走っているのか、それとも国や電力会社と言うように8キロから6キロ沖合を走っているのかは別として、地震への安全対策をとって原子炉を動かすことが安全なのか、それとも運転をやめて核燃料を抜いて別の場所に保管することが安全なのか、安全の度合いが高いのはどう考えても後者の方です。だから私たちは伊予灘沖の地震が起きる前に一刻も早く伊方原発を止めたいと思っているのです。



小松正幸元愛媛大学学長